

カパドキア (Cappadocia) の火山地帯を行く

～アナトリアの旅 その2～

河田 清雄 (地質部)

カパドキアの歴史と風土

アナトリア (小アジア) のちょうど中央部には古くからカパドキアと呼ばれる地方がある。カパドキアの起源は遠く B. C. 3 世紀頃のヘレニズム時代にさかのぼる。

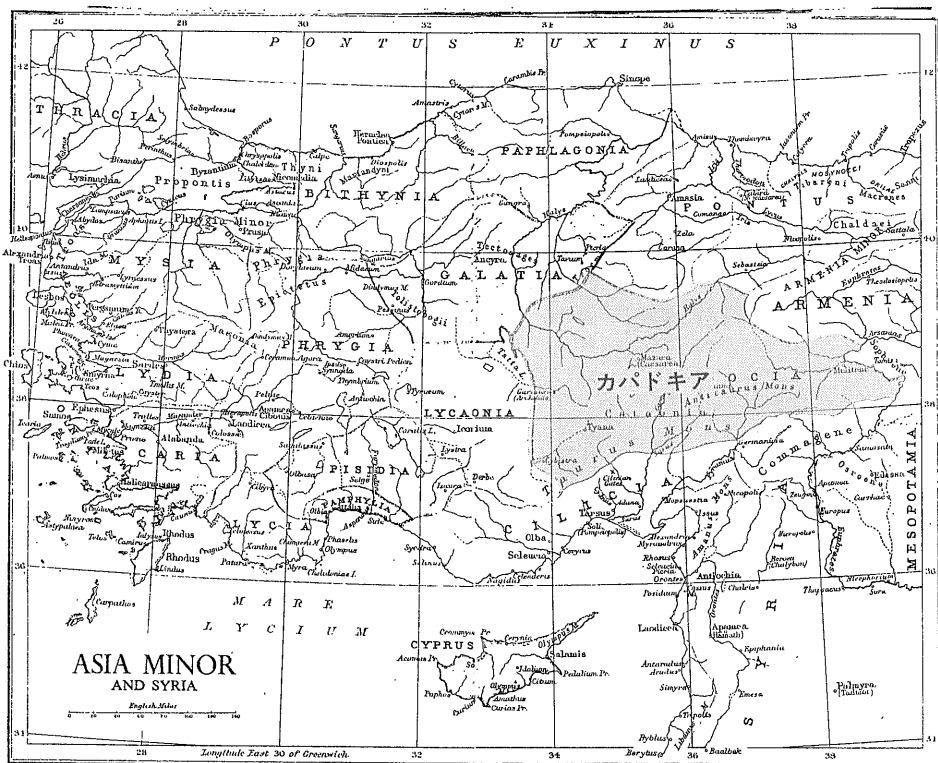
B. C. 323 年にアレキサンダー大王が死去すると彼の武将アンティゴヌスが小アジアを獲得した。そして B. C. 301 年にアンティゴヌスが暗殺されると小アジアにはビティニア (Bithynia) ガラティア (Galatia) フリギア (Phrygia) ポントス (Pontus) カパドキア (Cappadocia) などの小さな独立国が誕生した。しかし 当時は有力な武将達の間で争いがあり セレウコス (シリア・イラン) プレトメウス (エジプト) 両王朝間でも小アジアをめぐる対立していた。

セレウコス王朝はローマとの戦に敗れ B. C. 190 年にトロス山脈以北のアナトリア領をローマに割譲した。

ローマはさらに小アジアの群小国家征服をつづけ B. C. 132 年にペルガモンを B. C. 74 年にはビティニアを また B. C. 64 年にはポントスを併合し 遂に小アジアの地はローマ帝国の手中に帰した。しかし ローマ帝国も A. D. 395 年に東西に分裂し 小アジアはビザンチン帝国に引きつがれ さらにセルジエツクやオスマン・トルコの時代を経て今日のトルコに至った。

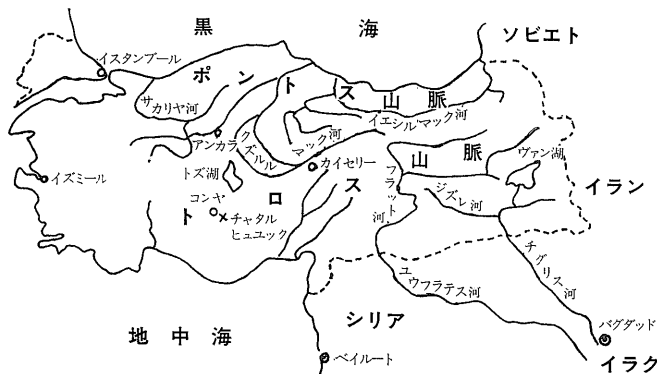
かつてのカパドキア国は 第1図に示すようにアナトリアのほぼ中央部に位置し 北の黒海からも南の地中海からもかなり距てられた内陸に入ったところで 海拔平均 1,000m を超える高原地帯を形成している。

この茫漠たる高原にも処々に 3,000—4,000m 級の高山がそびえて立っており 旅する者にとっては単調な景観を救ってくれる。 またこの地域西縁の一角にはアナト



第1図
ローマ帝国の支配下に入った小アジア (アナトリア) とシリアを示す図
紀元 2 世紀頃

© - John Bartholomew & Son 114 Edinburgh



第2図 トルコの地勢略図



① ぶどうの収穫祭で町をねり歩く仮装行列は オスマン時代の軍装である (ウルギュップの街角にて)

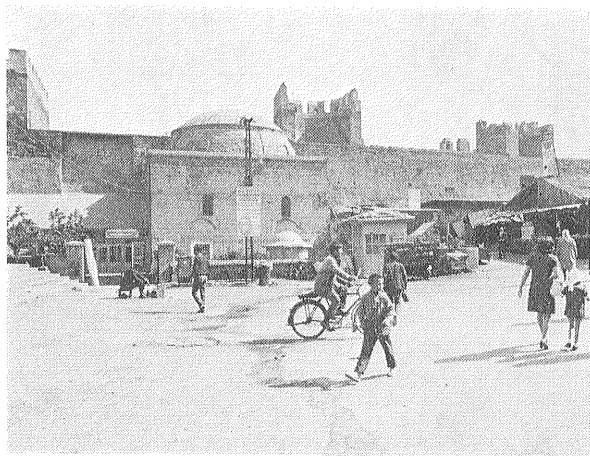
リア最大の塩湖である トуз ギョル (Tuz Göl) が夏は水分が蒸発して塩分だけが残り 灼熱の原野に塩野原が白い地平線を描き出している。この地方では春先に時として激しい雷鳴を伴ったりして降雨がやってくるほかは コバルトブルー一色で夏ともなれば雨はめったに降らず 地はひからびて“岩漠”となる。“岩漠”は文字どおり岩の漠で生命の存在を拒否し 無限の褐色の岩山として広がる。しかし この地方にも緑なすオアシスがないわけではない。遠く東の山の彼方に源を發し この地方をほぼ東西に流れるトルコ最大の河の1つクズルマック河 (Kizilirmak N.) とハサンダグー (Hasan Dağ) に源を發するメレンディズ河 (Melendiz S.) に沿った地域では 緑の草木を育て人畜の生存を可能にしている。したがって この両河川に沿ってアクサライ (Aksaray) ネブシエヒール (Nevsehir) ウルギュップ (Ürgüp) カイセリ (Kayseri) などの宿場や都市が開けた。その昔カパドキアの首都はカエサレア

(Caesarea) と呼ばれたが 今ではカイセリーと命名され カイセリー県の県庁所在地である。カイセリーの市街は旧市街とこれから外側に発展した新市街とに分かれている。旧市内には城塞が残っており 古びた城門をくぐると中はごみごみしたパザール (市場) が店をひろげている。

もう今ではローマ帝国時代の面影はなく 市内には絨氈屋が多い。ここはカイセリーの少し東のブニヤン (Bünyan) 地方で織られる有名なブニヤンカーペットの集産地としてもよく知られている。アンカラの南東約280kmで アナトリアのほぼ真中に位置する人口約15万の都市である。

中央アナトリアの火山帯

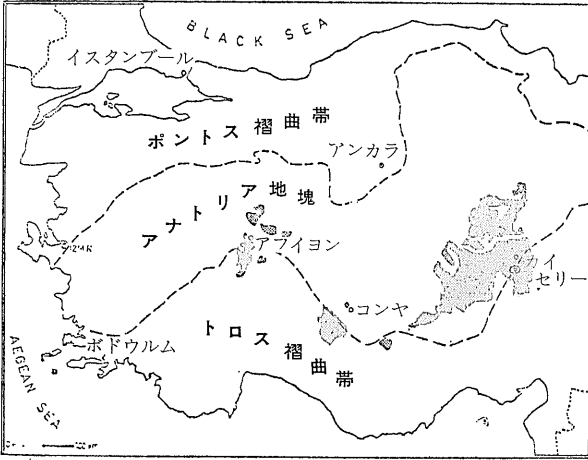
カパドキア地方は新第三紀の中新世の終り頃から第四紀にかけて激しい火山活動の場となった。この地方はトルコの地質構造区分ではアナトリア地塊に属している。



② カイセリーの中心部にある旧城跡で 城内にはパザール (市場) が店を出している



③ メレンディズ渓谷をゆく羊の群れ うしろの台地は火砕流堆積物で上部の柱状節理のある部分は 溶結凝灰岩



第3図 アナトリアの地質構造区とトロス山脈北縁に沿って分布する西部および中部アナトリアの新第三紀~第四紀火山岩類
 アミの部分は火山岩類の分布地域
 KETIN (1966) と KELLER 他 (1971) による

ここはちょうどアナトリア地塊とトロス褶曲帯とを画するトロス山脈の北縁にあたり トルコの主要な火山帯の1部を占めている。この火山帯は西はエーゲ海岸のボドルム (Bodrum) からアフィオン (Afyon) カイセリーを経てヴァン湖 (Van Göl) に達し さらにその延長はアルメニアにまで伸びている。

この火山帯には トルコでも著名な第四紀火山が多くカバドキア地方に限ってみても ネブシエヒールとカイ

セリーの周辺にかけて ハサンダア (Hasan Dağ 3,258 m) メレンデイズダア (Melendiz Dağ 2,935m) およびエルジヤスダア (Erciyas Dağ 3,916m) などの諸火山が配列している。これらの諸火山は中央アナトリアでは最も高くまた規模も大きい。

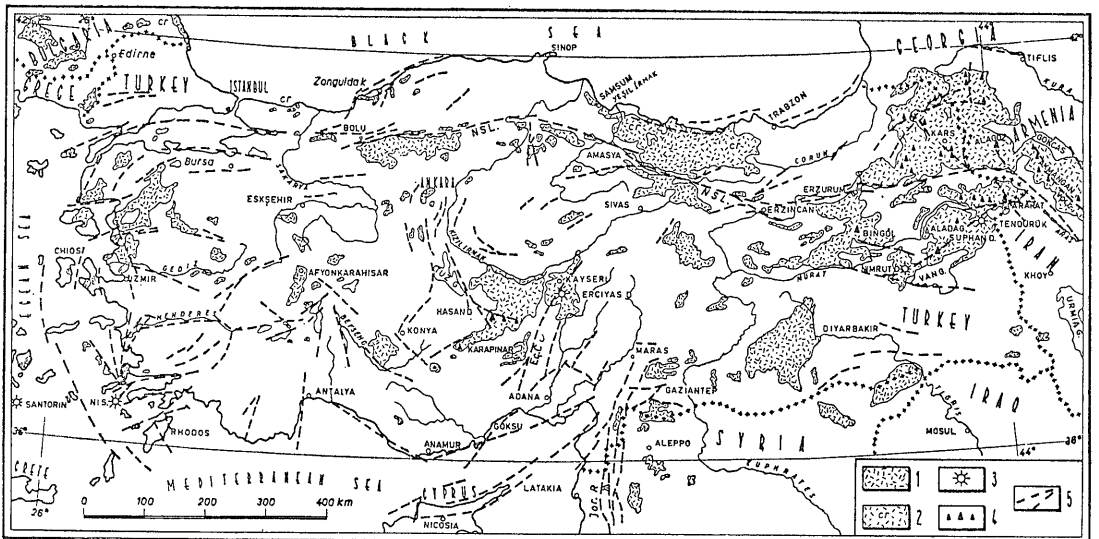
トロス山脈の隆起と前縁帯の陥没

アルプス造山帯に属するトロス褶曲帯の最も強力な広域的な造山運動は 白亜紀末のララミー時階 (Laramide Phase) に起ったが 漸新世に入って突発的となり 中新世になって造山運動から造陸運動にとつてかわり その後次第に海面上に姿を現わしてきた。山脈全体としての上昇は 現世までも引つづいている。

トロス山塊の造山運動に伴って前縁地帯であるアナトリア地塊は相対的な沈降運動により次第に陥没していった。隆起と沈降・陥没は地質現象としてはペアとなりしばしば火山活動などの地変を誘発することが多い。このような陥没運動の主要な役割を果した断層活動が火山爆発のひきがねとなった。

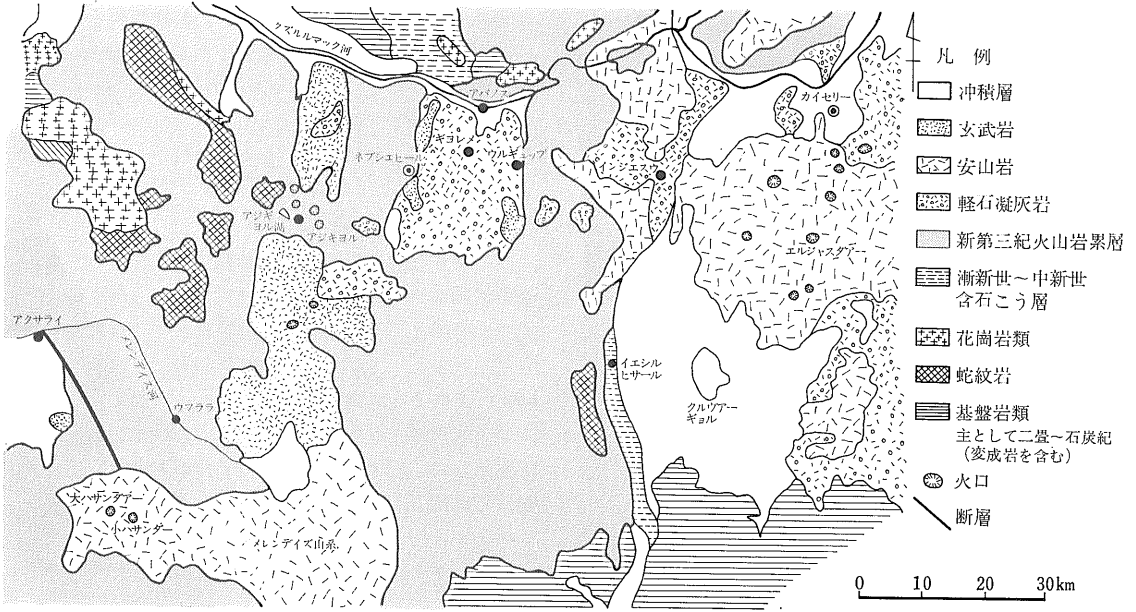
火山活動のはじまりと湖の誕生

火山活動は強力な爆発力を伴った流紋岩-石英安山岩質の酸性火山活動であった。噴出の中心はトズギョル (塩湖) の東縁を NW—SE に走る断層帯であった。この断層帯の地下深部では火山活動を引き起すに充分な



第4図 トルコとその近隣国の火山岩類 (主として第三紀) 分布略図
 1=第三紀の時代に噴出した火山岩類 (凝灰岩を含む) 2=白亜紀の時代に噴出した火山岩類 (凝灰岩を含む) 初期の噴出物は主として安山岩で これに次いで粗面岩 粗面安山岩 石英安山岩 流紋岩である。末期の噴出物は主として玄武岩で この他にテフライトや白榴岩などが含まれる。 3=第四紀火山 4=新第三紀の火山 5=主要な地質構造線および断層(推定されたものを含む)
 NSL: 北アナトリア断層 EaC: エジエミスーコリドール (断層とスラスト) Jor. R: 東アフリカ断層帯の延長

BLUMENTHAL 他より引用



第5図 アクサライーネブシエヒールーカイセリー地域の地質略図 M. T. A.発行 50万分の1地質図「カイセリー」より引用

張力が働いていたらしい。火山爆発に伴って陥没が起りさらにこれらの運動のくり返しによって次第に地溝（グラベン）が形成されていった。グラベンは現在のトズ湖の東からアクサライ（Aksaray）ーネブシエヒールーカイセリーをつなぐ地域に形成されはじめはほぼE-Wに開いた水路となり流水によって運ばれた碎屑物が堆積していったがこのような流れは停滞してゆきいつしか湖水の性格を帯びようになった。このような環境の変化はおそらくトロス造山帯前縁の断層地塊化運動による落ちこみや火山活動により多量に放出された火砕流堆積物（Pyroclastic flow deposit）の埋め

たてなどが原因となっただけでなく、湖はSWから次第にNEに広がって行った。

ガス爆発で放出された多量の火山灰や軽石などの降下噴出物は数10kmの距離もものかわはるばると大空をただよいつつこの地に誕生した巨大な湖に運ばれて静かに沈積していった。湖には火山爆発で空から降ってきたものばかりでなくて陥没しなかった周りの山地から削られて湖に落ち込んでくる古い地層や岩石の碎屑物もたまっていった。湖のもっとも深いところは300m以上もの水深があった。穏やかな環境の湖底に



④ シルト岩や凝灰岩の互層からなる湖沼堆積物 道路沿いに果樹園があり ぶどうなどが栽培されている（ウルギュップ付近）



⑤ ウルギュップ南方の火砕流堆積物 上部は溶結凝灰岩



⑥ 溶結凝灰岩台地の下に開けたウルギュップ付近の町

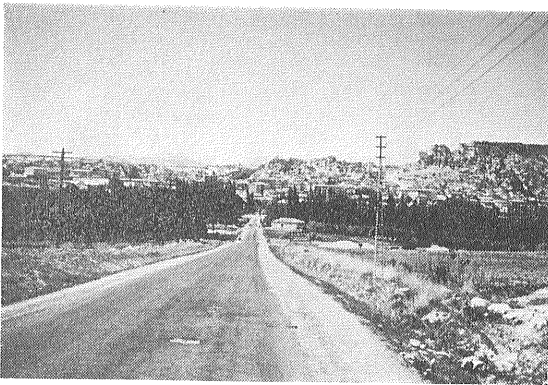
堆積した凝灰岩やシルト岩には見事な層理が発達した。
この地域では これらの地層は 5,000km² にわたって
分布し “新第三紀火山岩累層” と呼ばれており 層厚

は300—350mに達する。 これらの凝灰岩やシルト岩か
らは脊椎動物で現在の馬の祖先である *Hipparion gra-*
cile が発見されている (E. CHAPUT). したがって こ
の化石によって “新第三紀火山岩累層” はポント階 (上
部中新統一最下部鮮新統) と決定された。

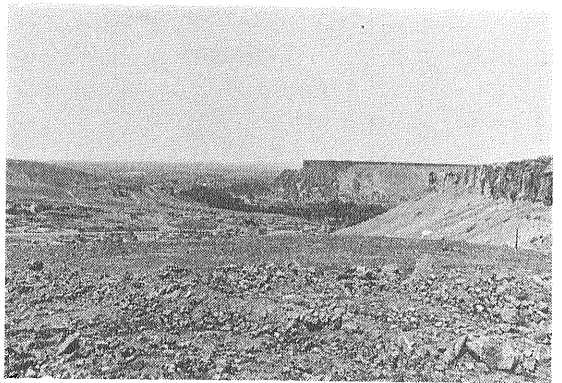
火 碎 流 堆 積 物

このような構造陥没湖のまわりでは依然として激しい
火山活動がつづいていた。 アジギョル (Aci Göl) 付
近でも同様な NW—SE 方向の割れ目や断層群から噴出
した。 また アジギョル湖は典型的な火口湖 (Crater
lake) であるとも云われている。 この頃になると エ
ルジャスダアーもハサンダアーも いっせいに火山活動
を開始して 流紋岩—石英安山岩質の火山噴出物を放出
しはじめた。

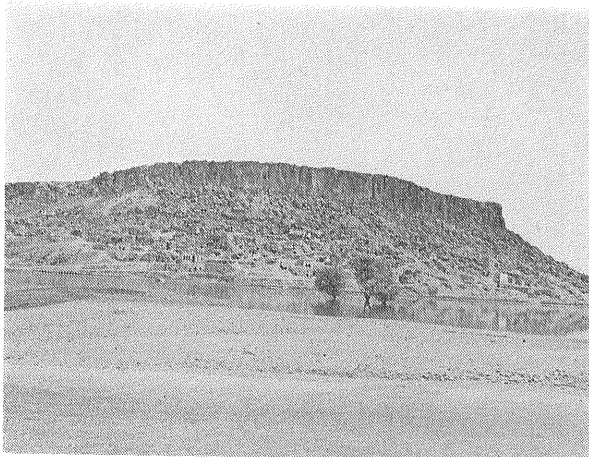
ハサンダアーの南では割れ目や断層群の方向は NE—



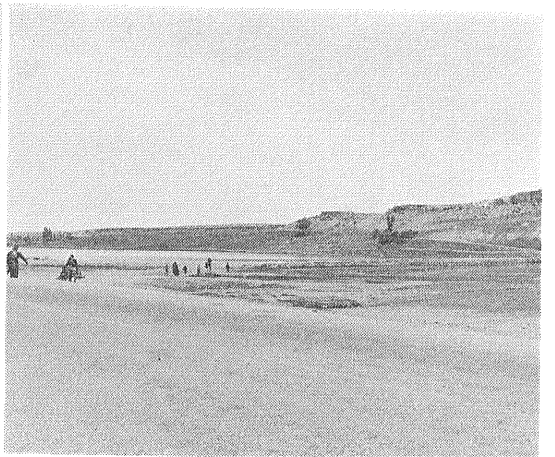
⑦ カイセリー方面 (東方) よりウルギュップの町を通りネブシエヒールに向う道 ウルギュップの町は火山台地をうまく利用して開けた



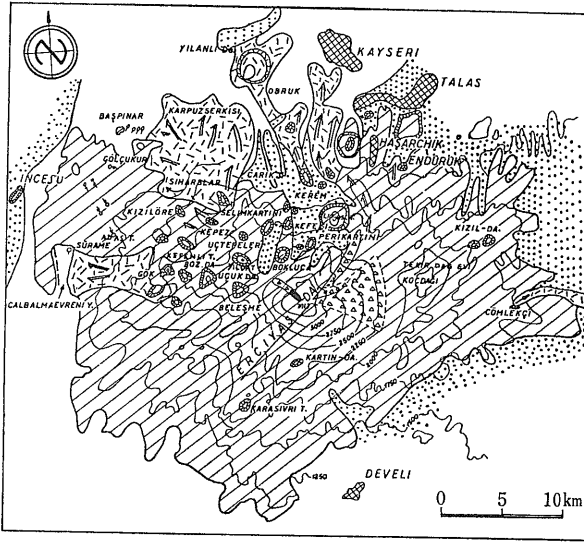
⑧ メレンディズ渓谷に沿ったウフララ付近の景観 見事な溶結凝灰岩台地は渓谷に臨んで断崖となる



⑨ ウフララ付近の溶結凝灰岩台地 上部の柱状節理の発達した部分が溶結凝灰岩である



⑩ メレンディズ河沿いのウフララ付近の火砕流台地 左端是水汲の女とろば (ドンキー)



- | | | |
|-------------------------|--------------------|---------------------|
| 1 [] 沖積層 | 4 [] 崖錐堆積物 | 7 [] 洪積世水堆石 |
| 2 [] 小さい氷河 | 5 [] かんらん石
玄武岩 | 8 [] 安山岩 |
| 3 [] 凝灰岩(溶結凝
灰岩を含む) | 6 [] 側火口または
火口 | 9 [] 古期溶岩の流理
方向 |
| | 10 [] 町または村落 | |

第6図 エルジャス火山の地質図
BLUMENTHAL と LEBRÜCHNER より

SWであった。このような張力によって生じた断層または広域的な構造地塊化運動が火砕流を噴出させるような酸性の“マグマ溜”の上昇と過熱とを促進した。地下のマグマの中には水などの揮発性成分がとけこんでいるが、マグマが上昇して圧力が低下すると揮発成分は飽和して気相として分離する。こうしてマグマの発泡がおこり、全体の体積が増大し、急激に発泡をはじめると爆発が起きる。酸性火山活動ではこのような爆発によって火山灰、軽石などがガスと混合し、混合物全体が一種の流体となって地表をつつ走る。このようなものを火砕流(Pyroclastic flow)とよんでいる。

熱雲(Glowing avalanche)と云えば、いかにも強力なエネルギーを感じさせるがこれも火砕流の仲間である。ガスが滑剤となるので斜面を流れるスピードは早く、時速数10km以上に達すると云われている。こうして遠隔の地に達しながら谷間や地表の窪みを埋めていった。あるところでは、数10m以上もの厚さの火砕流が堆積し、その中心部は強く溶結して緻密な溶結凝灰岩(Welded tuff)となった。

溶結凝灰岩の典型はギョレメ(Göreme)ーウルギユップ(Urgüp)の道路沿いに見事に発達している。とくにギョレメからカイセリーに向かって左側の丘には、高さ約100mの崖がみられ、その上部は全く平坦である。下

方から約70mまではやわらかい非溶結の凝灰岩層で、それから上は硬いコンパクトな溶結凝灰岩となっている。溶結した部分には見事な柱状節理が発達している。

アクサライからメレンディズ川に沿って遡るとウフララ(Ihlara)の手前で見事な溶結凝灰岩の露頭を見ることが出来る。ここでもメレンディズ河に臨む高さ約100mの断崖をつくっている。

酸性の火砕流堆積物からなる台地はやせ地が多く、平坦面の上には農耕地がない。しかし、この平坦な床は農作物の収穫時の脱穀場として重宝がられている。

エルジャスダアー(Erciyes Dağ)

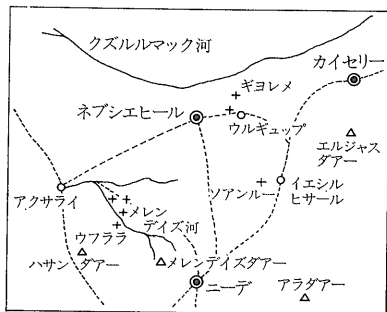
ローマ時代にはArgaeus山、またギリシア・ビザンチン時代にはArgaios山とも呼ばれてきたが、今ではトルコ語でエルジャスダアーという。ダアーとはトルコ語で山のことである。

アルプス褶曲帯のトロス山脈西縁のすぐ外側に位置する。中央アナトリアでもっともよく火山の形態を留めている山の1つであろう。カイセリーの街からでも山頂部にははっきりした火口が見望できる。エルジャス火山の噴出物は広く1,300km²の面積をカバーしている。

標高3,916mの高さをもつ中央アナトリアの最高峰で、複式成層火山である。カイセリー高原の平坦面から更に2,900mそびえ立っている。中央火口と多くの二次的寄生火口丘をもっている。とくに北側のスロープに沿って多くの側火口丘が点在している。山頂のNNWには氷河があって小さな溪ができている。氷河は3,300mの地点まで下っている。またこの溪の付近には氷堆石がみられる。



① インジエスウ村近よりエルジャス火山(3,916m)を望む。この平坦面は海拔約1,500mの火砕流台地で、道路はカイセリーに向っている。5月のエルジャス火山は中腹まで雪におおわれている。



第7図
カパドキアの主要な洞窟 キリスト
修道院跡位置図



② ハサンダグ (3,258m) 右側がブックハサン (大ハサン) で左側がクチュックハサン (小ハサン) メレンデイズ渓谷をさかのぼりウフクラへの途中 火山性台地より望む

現在では雪線は山頂部付近まであがっているが 洪積世の頃には2,800mの高さであったと推定されている。山頂部付近は35~40°の急な斜面をつくっているが 中腹部またはそれより下では20°位である。

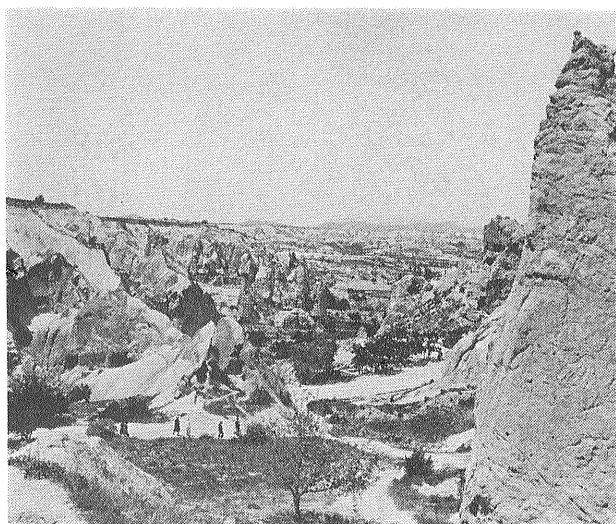
山体の中央部には沢山の側火口や新旧それぞれの時代の溶岩流が重なりあったために不規則な地形を示している。最初の噴火の中心は今の山頂付近であったことが溶岩流や火砕岩類の傾斜や構造から推定されている。噴火口付近には安山岩の角礫でできた垂直な崖がみられる。

エルジヤス火山は その南方のトロス褶曲帯からほぼN-Sに向って走る断裂帯の北端部に位置しているがこの地質構造上の重要な位置が火山活動の発生と密接に関係したことはいうまでもない。

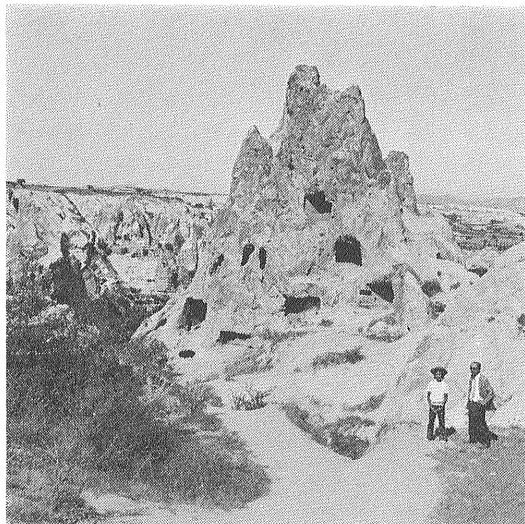
火山活動のサイクルとしては 初期に流紋岩-石英安山岩質の火山灰や軽石の噴出と あとで溶結凝灰岩となった火砕流の放出があり 次に安山岩溶岩とそのスコリ

ヤの噴出がつづき 最後は玄武岩溶岩の噴出で終わった。火山灰や軽石 火砕流は遠くに吹飛されたり流動して行ったため 山体の大部分は安山岩や玄武岩の溶岩とスコリヤでおおわれている。

エルジヤス火山の活動開始はポント階と考えられているが 最後の活動は歴史時代に記録されている。エルジヤス火山の噴火の様子は当時のローマ帝国のカパドキアの貨幣に刻まれていた。また この時代の著名な博物学者でポントス (Pontus) 生れのストラボ (STRABO B.C. 63~A.D. 20) は その著書“地理学” (Geographika, XII, 2, 6-7) の中で Argaeus 山つまり今のエルジヤス火山の噴火を記録している。それによればエルジヤス火山の山麓の方で火煙がのぼるのを望見している。しかし これは恐らく後の寄生火口丘の活動か



⑬ キリスト教徒達が住んだギヨレメの渓谷 風化・浸食された軽石凝灰岩の奇観 (差別浸食の1列)



⑭ ギヨレメの奇観 軽石凝灰岩中に掘られた洞窟は2層 3層になり 外敵の侵入をふせぐ工夫がしてある

または末期の硫黄作用に属するものと考えられる。

ここで当時の地理学 地質学 博物学などの泰斗であったストラボについてももう少しふれてみよう。 彼はおよそB. C. 7年頃には“地理学”(全17巻)の大半を完成し その後少しずつ新しい事実を追加しながら改訂していったと伝えられている。 また ストラボは大変な旅行家で当時のローマ領の殆んどを踏査すると共に数多くの自然現象を観察し記録していった。 とくに 火山として著名なエトナ ベスビオス リパリ島などの火山現象を記録した。 したがって 彼にとってはエルジヤス火山もごく身近な存在であったにちがいない。

ハサンダア (Hasan Dağ)

ハサンダアはブエックハサンダア(大ハサンダア)とクチエックハサンダア(小ハサンダア)とにわかれ夫々独立した火口をもち これらの火口から噴出した安山岩溶岩はメレンデイズ山系の大部分を構成している。 初期火山活動は流紋岩質の火砕岩類の噴出ではじまり つづいて安山岩類が そして最後は玄武岩の活動で終了した。 流紋岩類は大部分が降下噴出物として遠くに運ばれ また 玄武岩は溶岩流として遠くにまで流下していった。 したがって ハサン-メレンデイズ山系は大部分が安山岩溶岩とそのスコリヤからなる。

大ハサンダアは多くの寄生火山をもち その山頂部には火口地形がよく保存されている。 ハサン火山と推定される噴火の状景はコンヤ (Konya) の近くのチャタルヒュエック (Çatal Hüyük) の遺跡で 寺院の壁画(B. C. 6, 200年)に残されている。 もちろん今ではエルジヤス火山もハサン火山も活動を休止して全く平穏である。

軽石凝灰岩中の洞窟修道院

ネブシエヒールからカイセリーに向う途中では ギョレメやウルギュツプを中心に かつてキリスト教徒達の住んだ住居の跡が軽石凝灰岩の内部に今でも洞窟として残っている。 キリスト教徒達は 紀元4世紀頃から続々とこの地に移住しはじめたと伝えられる。 彼等はエジプトやシナイ半島 パレスチナおよびシリアなどの砂漠に修業の場を揚げながら この小アジアの地にたどりついた。 このカパドキアには無人の岩漠地帯がはてしなくつづいていたが 虚栄や物欲に満ちた俗世を棄てて孤独の中に神と相対し それに生涯を捧げようとして決意したキリスト教徒にはここはまことに恰好の地であったろう。 現在のネブシエヒール東方のウルギュツプの町付近に 7・8世紀のはじめ頃にはかなりの岩窟修道院ができていたらしい。

洞窟の内部は聖堂を除いては非常に簡素なもので 食堂 作業室 寝室などが付属している例が多い。

食堂では 凝灰岩を削って平な食卓とし 腰掛もテーブルの高さにあわせて長い板状の凝灰岩で作られている。 聖堂の内部には壁画が残されているものもあるが 全く装飾のないものもある。 壁画には 十字架その他の抽象文字のようなものと キリスト 聖母子 聖徒などの姿やその説話の場面を金色その他の絵具で彩色したものがある。 しかし 保存が悪く荒廃しているのが惜しまれる。 壁画の時代についての詳細は分らないが 抽象画的なものは8・9世紀頃 彩色のキリスト像などは10世紀以降と考えられている。 壁画の残っている洞窟聖堂は ネブシエヒール県のウルギュツプ付近 カイセリ



15 ギョレメの洞窟 修道院の聖堂の壁画
10世紀ころの作と伝えられている



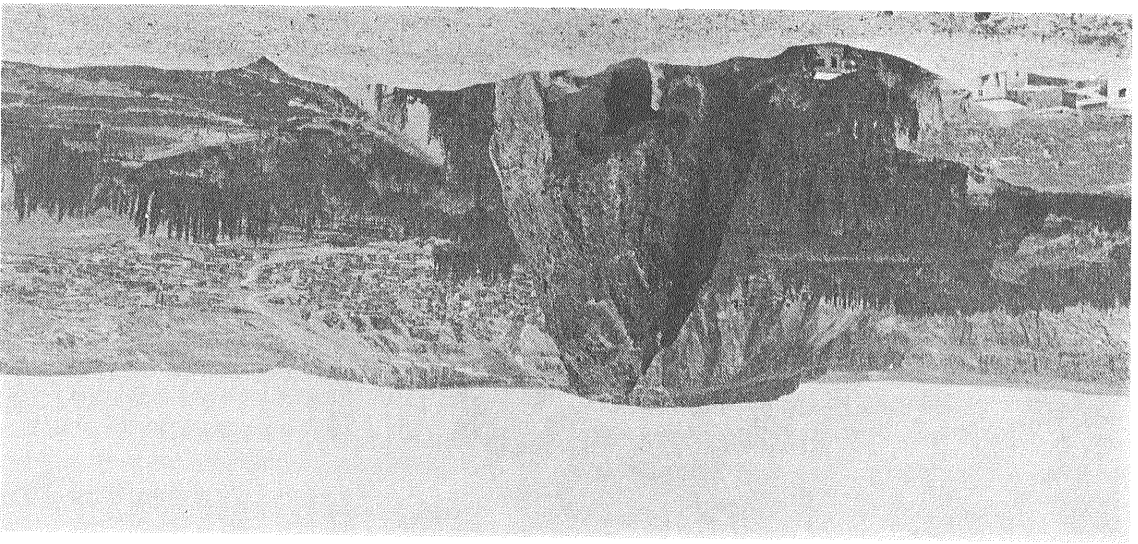
16 ギョレメの洞窟修道院の聖堂内の壁画

一県のソマニウ溪谷 ニーゾ県のウアラ溪谷沿いに多く その数は100にも達するといわれている。洞穴の住居や聖堂は外敵の侵入を防ぐ目的で 部屋が上下に2層または3層に分かれているものもあり いざという時には小さな入口の穴を石でふさぎ工夫がこらされている。凝灰岩はざらざらとしており すべり易く侵入者を防ぐには天然の城砦ともなったであろう。

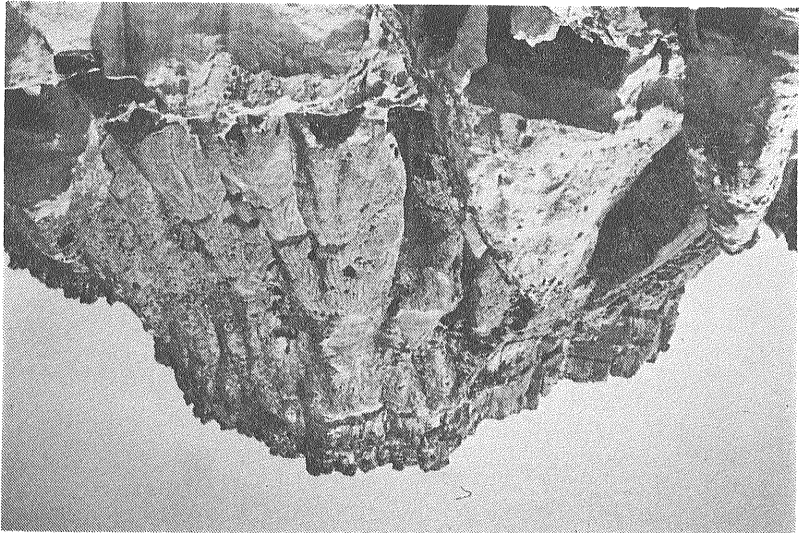
洞窟の掘られているところは 何処も同じ地質の軽石凝灰岩である。軽石凝灰岩は灰白色で 比較的やわらかく洞窟などを掘るには極めて適しており 多孔質の軽石などを多く含むため通気性もあり 住居にも適している。彼等が自然の立地条件を如何にうまく利用している

るかが分る。しかも この凝灰岩は適度の堅さも備えており 天盤が崩落するようない心配もない。 径数 cm またはそれ以下の軽石片がかなり多量に含まれる。 軽石片は殆んど扁平化を受けていないことから 非溶結の凝灰岩である。 洞窟は必ずこのやわらかい凝灰岩中に掘られているが ギヨレメ付近では この凝灰岩の上に浸食からとり残されて帽子をかぶった様な形の堅い岩の奇妙な群れが見られる。これは溶結してコンクリートになった部分であって とても堅くて洞窟を掘るには手におえなかったであろう。

ギヨレメの土産品店では 軽石凝灰岩で作った洞窟の模型を観光客相手に売っている。



① 丘上の洞窟からウアラの溪谷を望む 対岸にも溶結凝灰岩の台地がみられる



② ウアラ付近の洞窟道院と住居穴 火のあいている部分はやわらかい軽石凝灰岩で 上部の節理のある部分は溶結凝灰岩で硬い

ギョレメの凝灰岩の奇妙な風化・浸食地形

海岸から遠く離れたアナトリアの内陸地方は 平均海拔 1,100m に達し 気候がきびしい。夏と冬の寒暑の差が激しいことは勿論であるが 夏でも日中と夜間では 40°C から 5°C までさがる激変ぶりを示すこともある。

アナトリアの夏の空はコバルトブルーに澄みきっており 灼熱の太陽は容赦なく岩を焼いてゆく。この期間のアナトリアの自動車旅行は快適だが注意しないと焼けてあつくなったボンネットやハンドルで火傷しそうになるほどである。冬はまた寒く雪に見舞われることもしばしばであるが 乾燥しているために降雪量は多くはない。しかし 冷え込みはすごく -20°C 以下を記録することも度々経験する。

アナトリア地方の年間降雨量は少ないけれども 春先にはしばしば雷鳴を伴った豪雨や巨大な雹に見舞われることがある。このような雨水は長い年月をかけて溝を掘り岩をうがってゆくが 岩石の化学組成と粒度や硬度の微妙な差が長い年月にわたって差別的な浸食となって奇妙な浸食地形をつくりだした。湖沼に堆積したシルト岩や凝灰岩は一般にやわらかいが 火砕流堆積物の中では 溶結した凝灰岩は緻密で硬く浸食に強い。

やわらかいところが次第に深くえぐられてゆくと 岩峰群となって孤立し 場所によっては円錐形や尖頭状の奇妙な岩が幻想的な自然景観を創り出していった。

ギョレメーウルギュップ地方には 帽子をかぶったような “きのこ” 形の岩がここを訪れる人達の目を楽しませてくれる。帽子の部分は溶結した少し硬い凝灰岩でできており 庇の部分はもっとやわらかい軽石凝灰岩である。これも差別浸食の1つの典型である。

浸食が進みやがて渓谷が出来てゆくと 火山岩台地も幾つかに分離されていくのである。また 断層地形による垂直な断崖もみられるが メレンデイズ渓谷のウフララ付近の雄大な溶結凝灰岩台地の景観は さすがにこの地方ならではのというべき絶景の1つである。

あとがき

アナトリアの内陸部を占めるカパドキアは不毛の荒地が多い。この地は比較的豊かな黒海と地中海沿岸地方の中間に位置するが さらに ペルシア インドをひかえて遙か中国までつながる西アジアの地に接し 西方はエーゲ海地域 パルカン ギリシアを介してヨーロッパにもつながる東西世界の接点にある。したがってこの地域が昔から経験してきた歴史は複雑で多岐にわたっている。

独自の文化をもったヒツタイト民族 (B. C. 2,000 —

B. C. 1,000) が エーゲ海から起った民族に亡ぼされた後 アレキサンダー大王の傘下に入り B. C. 3世紀頃には独立した王国を形成したが 後にローマの属領となった。やがて キリスト教の時代に入るが 4世紀以後この地はキリスト教思想上 著名な教父を輩出したと伝えられている。当時のキリスト教は このようなやせた荒野を舞台として根強く広がっていったらしい。彼等はひよっとしたら火砕流台地のもつ独特の風化・浸食から生み出された渓谷と 尖塔状岩峰群にひかれてこの地に集ってきたのかもしれない。

歴史時代に入ってから火砕流を主とする火山活動は噴出時の強大な爆発力と すざまじい流下速度で熱雲が原野を焼きつくしてゆくため 人蓄に多くの被害を与えてきた。しかし この火砕流台地に小さな洞窟をうがって住みついて共同生活をした人々がいたとは 自然と人間の営みについて現代に1つの教訓を遺したものと見えよう。

最近になって この地に残されたキリスト教徒達の文化的遺産が国際的な注目を集めはじめ わが国にも紹介されている。ボスフォラス海峡にヨーロッパーアジアを結ぶ大橋がかけられてからは一層多くの観光団が続々とバスでヨーロッパ各地からくりこんでいるが この地の自然と歴史の織りなす絵模様は ちょっとしたブームにわいている。

文 献

- ADAMS, F. D. (1954): The Birth and Development of the Geological Sciences. Dover Publications, Inc., New York
- BEEKMAN, H. (1966): The Pliocene and Quaternary volcanism in the Hasan Dağ-Melendiz Dağ region. MTA Bull., no. 66
- BLUMENTHAL, M. & KAADEN, G. (1964): Catalogue of the Active Volcanoes of the World Including Solfatara Fields. Part XVII, Turkey, International Association of Volcanology.
- 学習研究社 (1975): 未来への遺産 第1集
- KELLER, J. & VILLARI, L. (1972): Rhyolitic ignimbrite in the region of Afyon (Central Anatolia). Bull. Volc., Vol. 36.
- KETIN, I. (1966): Tectonic units of Anatolia. MTA Bull., no. 66
- MELLAART, J. (1965): Earliest Civilization of the Near East. Thames and Hudson
- M.T.A. (1963): Geological Map of Kayseri (Scale 1: 500,000) and its explanatory text
- THOMSON, J. O. (1966): Everyman's Classical Atlas. Third Edition, Everyman's Reference Library.
- 在トルコ日本国大使館編 (1969): トルコ共和国。日本国際問題研究所